



美術センター
久我記念館

7月企画展 1日(土)～23日(日)

(月曜休館・祝日の場合は翌日休館・入館無料)

『能・狂言面』と『相貌』写真二人展

木村 如次さん・椎野 実さん

『能・狂言面』と『相貌』写真二人展が7月1日から久我記念館で開かれます。能・狂言面と写真。両者は一見関係がないように見えますが、有名な能面師、森如野さんを中心に結びつきます。

能面師の木村如次さんは森さんのもとで面打ちを学び、写真家の椎野実さんは森さんが京都から福岡にきた時から撮影を行なっています。今回は、森如野さんの系統を組む能面の世界を椎野さんの写真と、木村さんの能面・狂言面などによって表現します。

椎野さんは、今から46年前に職場のサークルで写真を撮り始めました。当時は、リアリズム全盛期で各種コンテストに応募しました。後に、社会性をテーマに1971年には水俣病写真展(グループ展)を開催。1979年には写真集『筑紫次郎物語写真集』を刊行しました。最近では、平成17年1月から2月にかけて写真展「相貌」を福岡アクロスにて開催されました。日本写真協会会員。

木村さんは、先述のとおり森如野さんに弟子入りして、1973年に森如野塾能面展に出品しました。1998年からは太宰府市情報センターの能面講師を勤められています。須恵美術クラブ会員。

「現在、能面の極意が伝わっていない。能面の良さが少しでも分かっていたらいい。」と椎野さん。「子どもの面はスーパーでお母さんの許可を得て観察しました。腫面(今から約800年前の舞楽面の一つ)の持つ苦しみや悲しみは面を打ちながら涙が出ました。」と木村さん。7月9日にはシャンソンライブも開催されます。

シャンソンママ“歌布着”による『下駄履き らいぶ』

- とき 7月9日(日) 14:00～
- ところ 久我記念館
- 曲目 「サン、トワ、マミー」「バラ色の人生」「さくらんぼの実る頃」など
- 入場料 大人 1,000円
子ども(高校生以下) 無料



椎野さん(左)と木村さん(右)



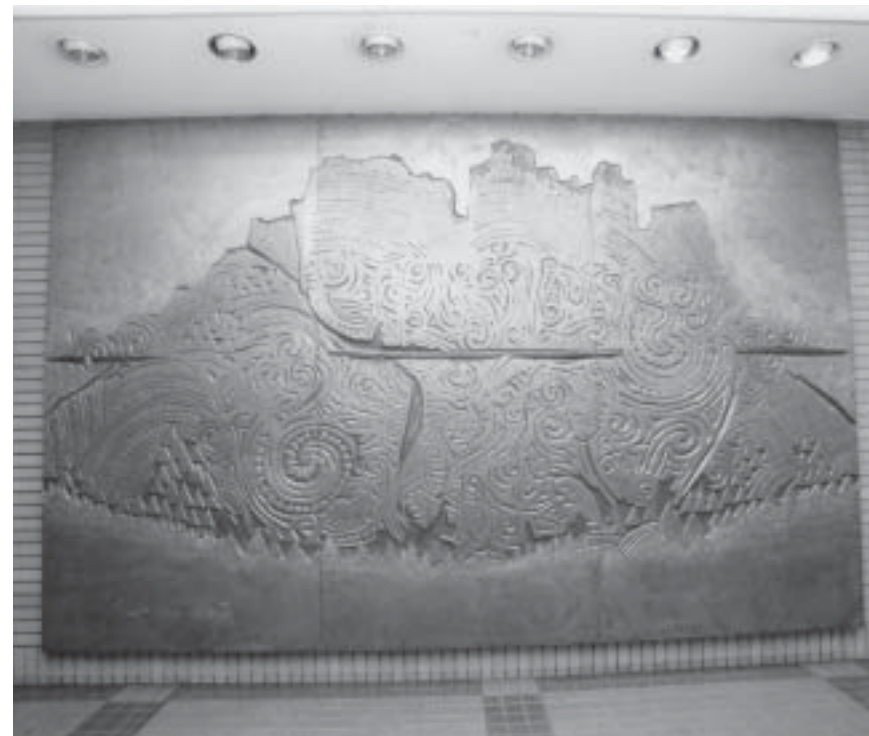
椎野 実「東本願寺奉納面を打つ森先生」

6月の企画展

6月3日(土)～25日(日) (月曜休館・入場無料)

河下 千春 展

鮮烈な黄と赤が基調、100号を中心に約70点



これは、役場庁舎の1階ロビーに展示している壁画「若杉山の草創」です。大きさは、縦2・92m、横4・5m、アルミ

ニウムで出来ています。この壁画は、昭和63年4月の庁舎開庁の際に、当時、北筑前養護学校教諭をされていた重富

サイの壁面も図版も裏返しですか？



基弘氏が創作した版木を基に、彫刻家の中西久吉氏が制作されたものです。重富さんは「若杉山は柔らかな地盤構造が地滑りを起こして現在の姿になった」と考え、「変貌する瞬間を須恵町史の興りの瞬間」として描きました。それを中西さんが、アルミニウム板をたがねとハンマーを使って浮き彫りし、版画型に仕上げられました。表面には金色を重ね塗りして、中央部は「地割れの線」を表現する赤色の線が描かれています。この壁画は、版木の拡大版になっているため、実際に壁画表面に色をつけて上から紙を当てると版画ができるようになっています。このため制作者のサインと山の位置は裏返しで作られています。役場にお越しの際は、この壁画を見て「須恵町史興りの瞬間」を感じてください。



修復前の十一面観音像

今回は、県指定有形文化財(彫刻)第1号の十一面観音菩薩にまつわる話です。前回、この仏像が以前はバラバラの状態であったと書きました。今回は、今から約50年前の仏像の発見から現在の姿にいたるまでの経緯を、当時の文書や昭和63年に教育委員会が行った聞き取り調査をもとに再現します。

この仏像はもともと、前の観音堂の中の長櫃(タンス)の中にバラバラの状態で見つけられました。かつては子どもたちが仏像の手や首を持ち出して遊びに用いていたようです。昭和28年9月12日、県文化財専門委員の裏辻憲道氏および県文化課技師の波多江一俊氏による学術調査が行われました。十一面観音像が文化財指定に足るとの指摘を受け、3日後の15日には文化財の指定申請を県に提出し、8か月後の昭和29年5月15日に指定を受けました。損傷がひどいため、翌年には東京国立博物館文化財修理部(当時)の手により、福岡市早良区百道の県社会教育会館(当時)にて修理が行われ、今日の姿となりました。(啓)

佐谷の秘仏十一面観音像



考古学

12